

# 機械化転換期における稲作技術の選択 —富士河口湖町の空中田植を事例に—

文化科学研究科・日本歴史研究専攻 渡部 鮎美

# 機械化転換期における稲作技術の選択

## —富士河口湖町の空中田植を事例に—

文化科学研究科・日本歴史研究専攻 渡部 鮎美

本報告では手植から機械植への転換期における稲作技術の選択がどのように行われたかを空中田植という農作業の省力化・収量の増加に特化した技術を事例に報告する。

調査地の山梨県富士河口湖町河口地区は河口湖に臨む高冷地で、稲作は同湖の干拓によって1940年以降に広く行われるようになった。稲作の機械化は1970年ころから進み、この機械化への転換期に空中田植の技術が普及した（農林水産省統計情報部 2001）。しかし、4～5年で空中田植は2戸を残して行われなくなってしまった。こうした稲作技術の選択はどのような観点から行われてきたのだろうか。

空中田植は1969年にペーパーポット苗の移植方法として秋田県大潟村で生み出された。現在は親指大の穴の開いたプラスチックのトレイで育てたポット苗を代掻き後の水田に直接投げ入れて植え付けるという方法で行われている。その後、育苗管理・移植が簡単で育苗土の節約ができ、苗の生育や増収にもよいということで農業試験場を通して全国で普及活動がなされた（宮坂 1976,445）。河口では1973年から空中田植が行われ、一時は20～30戸が実施していた。

先行研究では、こうした技術の選択を文化や伝統という側面から解釈してきたが、個別具体的な検証には至らなかった。本報告では、転換期の稲作技術の選択がどのように行われたかを聞き取り調査と農作業の参与観察、生産費と労働時間の計量・計測によって明らかにした。

河口での空中田植と機械植の10a当たりの生産費と労働時間を比較したところ、空中田植は生産費が安く、収量が多かった。労働時間も機械植より短く、効率的な農法であることが分かった。しかし、空中田植の技術は1971年の生産調整に伴う稲作の小規模化、販売型から自家消費型への転換といった稲作経営の変化により次第に衰退していった。つまり、転換期を経て、空中田植のメリットである省力化・増収はもはや農家にとっての魅力にはならなかったのである。さらに、転換期以後、空中田植の志向した効率化に反して、自分の家で食べるために手間をかけておいしい米を作りたいと考える人も多くなっている。

また、個々の田地が近接している河口では普段から田の植え付け面の様相や作業の様子から農家の働き方が評価されている。手植や機械植の条間の揃った田や丁寧な植え付け作業は熱心に働いている人という評価がされる。一方、空中田植の乱れた植え付け面はいい加減な植え方と見られ、田植をした農家までもがいい加減な人だという評価をされる。その上、投げるという移植方法は河口の人たちには粗雑な農法ととらえられ、強い抵抗感が示された。つまり、小規模・自家消費型稲作を行う河口では、経済効率ではなく、植え付け面の美観や田植方法の丁寧さといった手間を重視し、空中田植を選ばなかったのである。

### 参考文献

宮坂昭

1976 「ペーパーポット苗栽培」『加除式 農業技術大系』  
作物編2 イネ・基本技術編 農山漁村文化協会

農林水産省統計情報部

2001 「農業集落カード」『2000年世界農林センサス』農  
林統計協会